

人生の旅の案内役、Y

私たち家族は、子どもたちを授かる前から、日本にやって来る外国人旅行者のお世話をしたり、一緒に遊んだりという生活をしていたのですが、そんな経験を通じて感じていたのは、人が信頼しあい、仲良くなるのに、肌の色も、国籍も、話している言語も関係ないということでした。

なので、次に生まれてくる子には、『どんな人とも仲良く出来るような、周囲の人達を大いに和ませるような人になってほしい』という思いから、"Y"という名前にしようかと決めていました。

そして彼を身ごもり、生まれてくるのを待ちわびていた妊娠30週目のある夜、突然の破水で、出産予定だった近所の産科から救急搬送され、その後出産となったのですが、へその緒が首に巻き付いていたりなどの問題も重なって、新生児仮死の状態で生まれ、その後脳へのダメージがあったことがわかりました。

それでも、病院の先生方のご尽力で、命をつなぎとめることが出来たことは、何物にも代えがたい幸運でした。

とは言っても、はじめは、脳に障害を持ってしまったことをなかなか受け止められず、落ち込み、暗い日々を過ごしていました。

「どんなに大変な生活になるのだろうか?」「身体機能や、精神面は成長してくれるだろうか?」「この子を生涯ずっと守っていけるだろうか?」・・・不安で不安で押しつぶされそうでした。

そんな真つ暗闇のトンネルの中にいるような自分自身の精神不安な状況を救ってくれたのは、同じようにハンデを背負った我が子を持った

お母さん方との出会いと交流でした。

特に、いこいの家に入園した頃から、色々なお話しのお母さん方と知り合え、お互い話ができるような環境が出来て、仲の良くなれたお母さんに至っては、家族ぐるみで遊べるようになれました。

更には自分の子供の状況を理解し、親身に色々な相談に乗っていただける先生方が常にそばにいるという環境が実現し、全く不安がないかといえは嘘になってしまいかもしれませんが、とにかく入園前と入園後を比べると、本当に心の安定を感じています。

今は、Yも年長クラスで、もうすぐ小学校の進学を開始する時期ですが、いこいの家の先生方や同じ状況を持つご家族の言葉やアドバイスがあるおかげで、全くと言っていい位、進学の不安を感じていません。そんな心持ちになれるようなことは、Yの上のお姉ちゃん・お兄ちゃんの時にはなかったので、本当に感謝・感謝です。

後ろ向きに考えると、Yの育児負担は、まだ大きいかもしれませんが、笑顔の絶えない毎日を提供してくれてもいて、その意味で、私達夫婦にとって、Yは既に誰よりも大いなる和みを与えてくれる存在であり、家族みんなの人生の旅路を面白おかしく有意義にしてくれる案内役なのかもしれません。

Yくん（五歳）のお母さん